

## 学修支援・学生生活支援アンケートの概要について

令和元年度前期に本学学部学生（1～6年次生）を対象に、生活実態およびニーズを把握し、今後の学修支援、学生生活支援改善のための具体的な方法を検討するためにアンケート調査を実施した。これより、アンケートの概要について報告する。

### 【概要】

授業外学修時間が1時間未満の者も少なくなく、授業への理解不足が懸念される。予習を全くしていない学生が4割程度もあり、授業外学修時間を確保させる対策が必要である。学修方法は様々であり、「同級生、先輩の作った資料を中心としている」も一定数いるが、学年進行とともに個人の学習スタイルが定着しているように思われる。睡眠時間は半数弱が6時間以上であるが、6時間未満も半数程度おり睡眠不足の状態と思える。学生生活の改善が必要である。オフィスアワーの認知度は低く形骸化しているため、学生に周知させる必要がある。アドバイザー制度に学生は概ね満足しており、制度が機能している。1年間を通して現在・将来に役立つような科目があったと回答した者が半数以上を占めた。その内訳は高学年ほど「薬学専門教育」の割合が「医療薬学教育」より多くなった。大多数の学生が大学公認のクラブあるいはサークル等に所属しており、多くはクラブ活動に満足感を感じている。しかし、高学年でも活動を続ける者や、学業への影響を自覚している者もいる。課外活動をしていない者の理由にも学業への影響があげられていた。これらを踏まえて、課外活動が学生の修学に対して影響していないか、今後も調査する必要がある。多くの学生が多様な職種のアルバイトをしている。多くは平日・休日共に働いているが就労は1週間当たり10時間未満であり、概ね妥当な範囲と考えられる。アルバイトが学業の妨げとなっているとした者は少ないが、1割程度の学生は深夜就労を行っている。これら学生については、修学に支障が出ていないか、継続して解析する必要がある。収入目的は様々であった。アルバイトをしていない者でも約8割が何らかのアルバイトを積極的に考えている。アルバイトをやめた理由としては妥当なものであった。このような大学生生活全般について否定的な意見は少数であった。